

白雲臨書 風信帖 (25)



川崎 白雲 先生

アリゾナの山

小伏 小扇



私が川崎梅村先生にお会いしたのは、中学二年生の時でした。筆友会報への出品作品を届けに、桑津のお宅へ何って以来のご縁です。筆友会報の最高級は、「一級」でした。その上、怠けていると級が下がるという厳しいものでした。「二級」になると、顔写真と先生の短評がつき、うれしかった思い出があります。

また、長男誕生時、先生は色紙を「裏の方がキラキラしていて、きれいだから裏に書こう」と言われて「銀も金も玉も何せむに、まさされる宝、子にしかめやも」と憶良の歌を書かれ、くださいました。何ごにも、斬新なお心の持ち主でした。

ある日、先生が我が家にお越しになったことがあります。部屋に入られて、額をこらんにになり、「ほうー」とおっしゃいました。

先生がアリゾナの印象を書かれた「山」の半切横額です。先生は額をこらんにになりながら、アリゾナの風景のことや、バスがフルスピードで進行するため、脱いだ靴が前へすべったり、後へながれていき、さがすのに難儀した話をしてくださいました。のちにイーデス・ハンソンさんから、同じお話を聞いたことがあります。



この「山」の作品は、先生のお宅で頒布会があり、求めたものです。購入時は、普通のベニヤ板に表具された作品だったため、木の灰汁が表面に出ていました。竹村が、「これは、いかん」と表具屋さん洗いに出し、その時、今の額装に直したものです。先生の額の下で、先生からご指導いただいた法帖の臨書をする時、60年前の初心に帰った気持ちがあります。

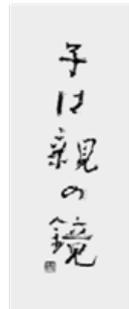
白雲臨書
風信帖
帖
(26)



川崎 白雲 先生

指導者養成講習会

小林 琴水



昭和四十年
中西淀蘭
先生に連

れられて川崎梅村先生のお宅にお邪魔しました。川崎先生は指導者養成講習会に来る様にと勤めて下さり、夜六時〜九時までの講座を受けることになりました。一日も休まず皆勤で一年は終了しました。中西先生の川崎先生に対する尊敬の念はすごいものでした。私も講座を受けさせて頂いて、川崎先生の偉大さには驚きました。怖さ、厳しさ、時には笑顔でやさしく接して下さる時もありましたが、教室に一步足を踏み入れると全員緊張感で身も心も引きまします。今の時代とは全く違います。今は、先生と生徒は友達の様で厳しさが無いなあと思います。「子は親の鏡」(先生に書いて頂きました)の様に私も中西先生を見ていて、川崎先生に対する姿勢は見習わせて頂いたつもりです。当時よく川崎先生に連れられてライオンズクラブのお手伝いに行きました。式次第を書いたり、感謝状を書いたりしてお手伝もさせて頂いたことは大変嬉しかったです。お返しを思い出します。



白雲臨書 風信帖 (27)



川崎 白雲 先生

白雲先生隨想

稲垣 小燕

「字は上手なほうがいいよ」…母の勧めで川崎先生の教えを受けることになった。気楽な気持ちで伺ったらいきなり講義が始まっていた。書に対する知識が無かった私には、先生が黒板に書かれる言葉 を全く理解出来ず、狼狽していた自分が今も鮮明に思い出される。その時、書の深さ、手強さを感じ、それがかえって私に書への興味を引く結果となった。

先生の指導は、まずは徹底した基礎修得にあった。臨書とそれを裏付ける学問、その両輪で指導された。毎週五十枚の提出、疑問に思ったことはまずは自分で辞書を引き調べ、その上で先生に教えを請うといったぐあいであった。無我夢中、四苦八苦の毎週であったが、今になって、先生に基礎力をつけて頂いたことに有り難さを痛感している。

先生は、先賢の書を修得するに止まらず、御自身の書風を打ち立てられたことは余人の知るところである。

「詩を作る者、古の体を学ぶるを以て妙とす、古の詩を写すを以て能しとせず。書も古の意に擬するを以て善とす、古の跡に似たるを以て巧なりとせず。」
(『性霊集』)

先生は芸術修行の本道を歩まれ、真の芸術の姿を私に示して下さいた人であった。書を学ぶということの本当の意味を教えて下さった方であった。



白雲臨書 風信帖

(28)



川崎 白雲 先生

大先輩といっしょに

小林 白萩

小学生時代の恩師岩本去来先生に連れられ、中野にあった川崎梅村先生のお宅に伺ったのが中学二、三年の頃でした。教室は広く、大小色々の筆がいっぱいあって、身が引き締まりました。土曜日の午後にご指導を受ける事になりました。今から思うと和田清香先生や喜多松琴先生といった大先輩の先生方とおけいこの時間帯がいっしょで恐れ多い事でした。

玄関の入り口に整理券が箱の中に入れてあり、順番を待ちました。待っている間にお手本を書いて頂く為の墨をすらせて頂きましたが、正座しての墨磨りは足がしびれて立ち上がれなかつた事も何度かありました。おけいこは九成宮體泉銘からでした。半紙縦半分の大きさ五枚だったと思いますが、半紙一枚でなかつた事は当時の私には斬新でした。その後第一回書道指導者養成講習会に入れて頂きましたが、現在の玄遠社上層部の先生方と席を並べての授業で、とても緊張の時間でした。恩地先生は前列右側だったと思いますが、当時からお忙しかつたのか講義の終りに時折ご出席でした。雅号をつけて頂いた時、おけいこ場の横に萩の花が咲いていて、「露が萩の花に溜まっているのが風情があつていいが、男っぽいので女性らしく白萩にしなさい。」とつけて頂きました。その時の川崎先生はとても慈愛溢れた目をしておられ、こわい先生ではありましたが、どこか親近感を覚え、この先生にずっと指導をして頂くように思つた瞬間でした。



白雲臨書 風信帖

(29)



川崎 白雲 先生

白雲先生から学んだもの(反省)

山田 臥牛

書の作品制作は日常生活の中から生まれるものだということを学んだ。平凡な日常生活の中であつても、見聞きしたことからヒントを得て自分の解釈と自分の内面を表現するのが作品だ。

少し話が飛躍するが、先生はよく山歩きをされていた。私が入門してまだ一年にも満たないころ、生駒山に行かれる先生のお供をさせていただいたときのことである。今や廃線になつた南海平野線から上町線に乗り換えるため、あべのの交差点で信号待ちをしていたとき、交差点角の喫茶店の御主人が歩道上に水を撒いた。慌てて後ろに下がつたが、やがて、その水が私たちの足元に向かつて何本かの筋状になつて流れてきた。これはどこにでもある光景だが、先生は自作の杖先でその水の数本の先端を四角に囲み、「これを見て御覧、絵になるでしょう」と、なるほど確かな抽象絵画だ。信号が変わり、歩き出したが、道を究めた達人の洞察力を目の当たりにしたこの日の大きな収穫であつた。

これが自己流解釈による、私の作品制作の原点となつたことは言うまでもない。その日を境に、日々の生活の中で、目にするもの、手にするものを作品に当て嵌め、ヒントを漁つた。結果として立ち止まることなく、同じ発想の作品は制作したくないという思いが芽生え、いつも異なつた視点に立つことを信条としたものだから、安定性に欠けてしまったのかも知れず、先生の教えを誤つて享受したための失敗を反省するところとなつた。



白雲臨書 風信帖 (30)



川崎 白雲 先生

「慈」は息子の名前

— 厳しくやさしく — 横谷 尚恵

昭和四十二年頃、筆友競書の初段試験を受け、中野の川崎先生のお家に初めて行った時のこと。大広間に机がずらりと並べてありました。半紙は三枚、先生が黒板に四文字書かれて「わかつたね」とサツと消してしまわれました。その四文字が何であったのか、すっかり忘れてしまいました。その中に「服」という字があった。墨をすって書いていると、先生が廻って来られました。私が服の字の筆順を間違えて書いたのを見られて、大きな声で「筆順を間違っている者が居るが、筆順を間違うのはドロボーと同じです」と、あまりにも強烈なお言葉に、今も頭の中にこびりついています。が、無事合格の色紙をいただきました。

昭和四十六年の中秋の名月の日に、信貴山のお寺へ臨書したもを持って行きました。先輩の方々が居られました。川崎先生が、きびしく注意して居られるのを見て、逃げて帰ろうかと考えているうちに、私の番になりました。「うーん」とニコリとされて「誰かね先生は」と聞かれる思いがけないやさしい笑顔に、ほっとしたものです。何を臨書したのかは、忘れしました。

芸術院展の作品を持って中野へ伺った時、漢字二十八字の作品を見て下さって「この中に字と言えるのは真中の『慈』という文字だけで他は字ではない」と叱られました。帰る道々考えました。「慈」は息子の名前の一字で、十四、五年も書きなれた字です。それ程書き込んで字になるのか、と、大切なことを教えていただいた、と気づきました。



白雲臨書 風信帖 (31)



川崎白雲先生

偉大な書人・梅村先生

上妻 華竹

川崎白雲先生。私がお会いした時は、
“梅村先生”。

長い間、先生の囲りには、居たような気がしますが、直接お話しした事もなく、ただ芸術院展のお手伝いにもご一緒したり、町春草先生がご来阪の折、梅村先生の日本舞踊も拝見したり、月一度の書話会でお話を聞き、先生の書に対する情熱を感じておりました。先輩達から厳しい先生とお聞きしていましたが、私はまだ新人だったせいか、幸い？ その厳しさに触れる事はありませんでした。

私の中では、梅村先生はやさしい先生、そして常に新しい事にチャレンジされる素晴らしい先生でした。水と墨をうまく混ぜて線を引き、淡墨と濃墨の独特の雰囲気をかもし出す作品を書かれたり…。

最後に梅村先生らしいエピソードをひとつ。或る時、先生のお宅に泥棒が入ったそうです。ところが、先生の作品には目もくれず出て行つたと、怒られたとか。本当にもつたない話ですネ。



白雲臨書 風信帖 (31)



川崎 白雲 先生

ゲートルとアロハシャツ
水田 春峰

昭和二十年（一九四五）敗戦、空襲で学校は焼失、陸軍歩兵師団跡に移りました。軍隊の建物がそのまま校舎でした。
川崎先生はその翌年、大阪池田師範学校から私たちの高知師範に転任してこられました。ゲートルを巻いた軍服姿をお見かけしました。少しはにかんだような笑顔が印象に残っております。

先生はまた学生寮の寮長も兼務され、何もないこの時代、物心両面にわたって私たちはお世話になりました。

勿論、書への思いは、書道部をつくり厳しい指導もなされたことでしょう。岡田米峰、恩地春洋、小島白洲君らの原点がここにあることは言うまでもありません。惜しむらくは私は別の道を歩んでいました。先生の書道の時間の記憶は余り残っておりません。

その後、五年の任期を終えられ、公職も辞し、再び大阪へもどられたようです。

それからのことは私には知るよしもありませんが、或る日、（昭和三十年代頃）恩地君が川崎先生、他に三、四人の女性を伴って私のところ（妻の実家、西雲寺）にいられて本堂で字を書かれたことがあります。（私は春洋君も玄遠社も知らない頃です）その時の川崎先生はアロハシャツを着ておられたように思います。当時としてはかなり目立つ服装です。何十年ぶりかにお逢いし、まさに隔世の感とその変容ぶりに驚きました。

新しい芸術の創造への意欲は何年間かのアメリカでの活躍は云うに及ばず、先生の持つ世界観、それに進取の気性、その生きざまはゲートルとアロハシャツとの間にうめ尽くされていくように思えてなりません。



白雲臨書 風信帖 (32)



川崎 白雲 先生

白雲先生 書話会

小合 梨雪

「えっ！私に。」ある日、白雲先生から封書で作品が届きました。びっくりして私の恩師、故中西淀蘭先生にその時お聞きしましたら、書話会出席の先生方へ送って下さっているようだとの事でした。直接お言葉を交わした事もご指導を受けた事もない私にまでと心が熱くなったのを覚えていきます。

月に一度、玄遠社審査会の前に白雲先生をお招きしての書話会が楽しみでした。その時頂きました貝の筆置きが手元にあります。

「この貝は筆置きにいいだろう。」と白い貝を私たちに下さいました。沖縄で滞在中、海岸で見つけられたそうです。そのお姿がドラマの一コマのように目に浮かぶのです。先生の不思議なお力でしょうか。難しいことをやさしく、やさしいことを深く、幅広いお言葉の持つ力で導いて下さった書話会でした。



写真は京都のモールギャラリーにて、白雲先生と一緒に写して頂いたものです。



白雲臨書 風信帖 (34)



川崎 白雲 先生

これは許せない

萩原 香扇

川崎先生に初めてお目にかかったのは、昭和四十四年、私が最初に毎日展に出品した時でした。たしか鷹合小学校の講堂で玄遠社（当時は梅村社）での締め切りだったと思います。今のように自分の筆などなく何もわからないまま初めて書いた二字書の作品を川崎先生をご覧になり、これは出せないと言われました。多分細い筆で書いていたのでしよう。「太い筆が無ければ、二、三本たばねて書くんだけ。教えて貰いなさい。」ときつく言われました。しかし、小伏先生が一点でも必要だから出品させて下さいと言われたのでなんとか一枚選んで下さいました。もちろんその年は落選しました。

二度目にお会いしたのは次の年の書道芸術院の締め切りの時でした。白雲先生のご自宅の大きな部屋で吾二先生と二人で選んでいただきました。これも毎日展同様初めての出品だったので、前年度の毎日展のきびしい先生のお言葉を思い出し、びくびくしておりましたら私の作品を見て、「これは良い。よく書けている。」とやさしくおっしゃっていただき、ほっといたしました。

その後、新書芸のモール展、先生の日本舞踊、書話等、きびしいお言葉、やさしいお顔と何度かお目にかかることが出来ましたが、直接ご指導をいただいたこの二回が一番心に残って居ります。

白雲臨書
風信帖
(35)



川崎 白雲 先生

「墨すつてくれるか」

中田 小蘭

先生の教室は中野の御自宅で教室と言うより、おけいこ場と言った方が、ピッタリ来る様な風情のある場所、何うと「来たか。墨を摺つてくれるか。」と、よく言われたことが懐かしく思い出されます。先生には、小学生の頃から御指導頂いていましたが、記憶に残っていることと言えば、競書出品した結果に、一喜一憂したことや、展覧会に作品を出品したことが写真に写っていて見て分かったぐらいで、ほとんど覚えていませんが、いつもにこやかに接して下さった記憶はあります。

ある時、明日、おけいこ日であることを忘れて、晩、慌てて、でも自分では納得の行く作品を書いたつもりで持つて行って見て頂くと先生は、ニコニコしながら「慌てて急いで書いたね。」と言って、丁寧に指導して下さいました。何で分かったのかなと思議でした。

又、先生から「講習会があるけれど受けてみないか。」といわれて、軽い気持ちで受けましたが、着いて行くのが大変で、宿題が多く、都合が悪く休むことも多く、随分回りの人達に、助けてもらい、先生に、何度もやり直しをして頂き、やっと何とか卒業することができました。本当にうれしかったです。この講習会は私にとっても忘れることの出来ない貴重な体験でした。川崎先生、本当に有難うございました。書を通して、人としての生き方を教えて頂き生涯、先生の様な潔い人生を送りたいと思います。

白雲臨書 風信帖 (36)



川崎 白雲 先生



アルコール会

崎井 恵風

今、高校生が書の甲子園めぐして、熱心に書と取り組む姿が、脚光を浴びています。私も高校生だった四十?年前を思い出す時、書道クラブで熱くなっていました。その時指導していただいた先生の紹介で川崎先生と出会いました。部活の楽しかった甘い思い出で師事した私には、高度な内容に必死に着いて行くのが精一杯。先生との会話も恐る恐る、悶々とした日々でした。そんな中、月一回のアルコール(歩こう)会が計画されました。当初は二、三十名集まった皆さんも、少しずつ減っていききました。世話人係になっていた手前、欠席する訳にもいかず、毎月参加している間に、素顔の先生の温かいお人柄に、親しく会話もできる様になりました。終り頃には、参加者は、三名(竹田尚堂先生、小村さんと私)が常連になっていました。お陰で皆出席の色紙をご褒美に戴きました。書ではあまりお誉めいただけなかった私ですが、唯一誇りにしている出来事です。その後旅に出られ直接ご指導を受けられなくなりましたが、結婚の時には旅先から手紙と共にお祝いの作品をお送りいただいたり、書道芸術院審査会員昇格の折には、写真の半切作品を頂戴いたしました。この言葉の意味をしつかり守りながら精進していきたいと思えます。

